東京大学哲学研究室『論集』40号（2021年度）
pp. 105-117

『存在と時間』における歴史化された超越論的哲学

中西　淳貴

本稿は、ハイデガーの『存在と時間』全体を貫く基本的な枠組みを、哲学史的な影響関係という観点から提示することを目指す。それにあたって、本稿はまず近年の超越論的解釈と呼ばれる解釈潮流を紹介する。こうしたカントからの影響を強くはかる解釈が近年では優勢であるが、それに加えて本稿は、先行研究ではほとんどかえりみられてこなかったニーチェからの影響を強調することで、超越論的解釈をアップデートすることになる[1]。

超越論的解釈と呼ばれうる潮流は、1990 年前後に登場したといえる。しかし、それ以前の研究史では、『存在と時間』における超越論的哲学の受容の度合いは低く見積もられていた。当時は、超越論的哲学を批判する後期ハイデガーとの統一的な視座から『存在と時間』を解釈するフォン＝ヘルマンの研究や、「事実性」や「歴史性」といった概念、あるいは解釈学的な構えが超越論的哲学を批判するものとして導入されたと主張する、ペゲラーやギニョンの研究が標準的な解釈として影響力をもっていたのである（cf. von Herrmann 1971[2004]; Guignon 1983; Pöggeler 1963[1990]）[2]。

そのような状況のなかで「超越論的解釈」をはじめて明示的に提示した論者としては、ゲートマンとオクレントが挙げられる[3]。ゲートマンは、「ハイデガーの哲学を一貫して体系的に、超越論的な方法という視点のもとで解釈することがこれまで欠けていた」（Gehtmann 1993, 71）と先行研究を批判しつつ、『存在と時間』総体に対する超越論的哲学からの強い影響を指摘した。そのうえで、存在の意味への問いについて、現存在分析という基礎的存在論を経由する『存在と時間』のもっとも根本的な方法が、「超越論的」であると主張された（Gehtmann 1993, 70）。たほう、「ハイデガーは、私たちの対象の多様な直観のなかの統一の源泉として主体を見てとることにおいてカントに従っている［…］」（Okrent 1988, 28）と指摘することで、オクレントはカントからの影響を内容に踏みこみつつ強調した。そしてオクレントは、「実存としての現存在の存在は、目的であることと考えられている」（Okrent 1988, 29）とも指摘する。こうしてオクレントは、『存在と時間』を『純粋理性批判』の実践哲学化として解釈したのである[4]。

その後の超越論的解釈の発展の準備は、彼らふたりによって整えられたといえよう[5]。もちろん超越論的解釈の内部でも少しずつ力点に差異はあるが、以下ではまず、最大公約数的に超越論的解釈を整理しておき、そのことによって『存在と時間』における「存在」や「存在者」、あるいは存在論的差異といったもっとも根本的な諸概念を超越論的哲学の受容として把握することを目指す（第 1 節）。次に、『存在と時間』がそのような超越論的哲学の受容にとどまらず、存在了解の転換という歴史的な視点を導入することでラディカルにそれを改訂していたことを確認する（第 2 節）。そして最終的にそうした改訂が、ニーチェからの影響であったことを指摘し、『存在と時間』の基本的な構えがカントの超越論的哲学の内部にニーチェの価値転換を導入することによって成立していたことを主張するのである（第 3 節）。

１.『存在と時間』における超越論的哲学の継承

私たちが超越論的解釈について確認すべき論点は、おおきくわけて三つ存在する。以下で順を追って確認しておこう。

１．１　『存在と時間』の現存在分析論

『存在と時間』の超越論的哲学的な側面を解明するにあたって、まずは「超越論的」という用語の定義を、カントの『純粋理性批判』に即して確認しておく必要があるだろう。

> 私が超越論的（transzendental）と呼ぶのは、諸対象というよりむしろ、諸対象についての私たちの認識様式―私たちの認識様式がアプリオリに可能であるべきかぎりでの―に総じて関わるすべての認識である。（KrV B25）

よく知られていることだが、ひとまずカントはここで「諸対象」でなく「諸対象についての私たちの認識様式」にかかわる認識を、「超越論的」と呼んでいる。

『存在と時間』は、現存在の存在了解という、存在者の意味を可能にする認識を解釈するものである[6]。そして、クロウェルが指摘するとおり、現存在分析論が有する内実は、「対象ではなく［対象の］意味を可能にするカテゴリー」

（Crowell 2001, 208）としての実存カテゴリー、すなわち「私たちの認識様式」を解明する試みである。かくして『存在と時間』の方法は、さきのゲートマンによる指摘どおり「超越論的」であるといえるのである[7]。

１．２　存在論的差異

さらに、こうした超越論的哲学としての『存在と時間』の構えを理解するために重要なのが、本書でもっとも根本的な論点のひとつである、存在者と存在との区別、つまり「存在論的差異」である。この両者の関係について、ハイデガーは端的に以下のように述べている。

> ［…］存在、つまり存在者を存在者として規定するもの、［…］それへと向けて（woraufhin）存在者がつねにすでに了解されているもの。（SZ 6）

すなわち、互いに区別される存在と存在者の関係とは、存在が存在者を存在者として規定するという関係である。その直後の、存在は「それへと向けて存在者がつねにすでに了解されているもの」であるとは、ハイデガーの術語に即してこれを言いかえたものである。「つねにすでに」という言い回しから示唆されているように、現存在は、存在なしに、存在者を経験することはできず、存在によって存在者を了解する。つまり、存在を了解することが存在者との出会いをアプリオリに可能にしているといえるのである[8]。

ここで、存在は存在者を存在者として規定するものの、それ自体存在者ないし、存在者が有している属性ではないことにも注意しておこう。ハイデガー自身、先の引用の直後で「存在者の存在は、それ自体存在者であるわけではない」（SZ 6）、あるいは、別の箇所で「ただ現存在が存在するかぎり、つまりは存在了解の存在者的な可能性が存在するかぎり、存在は「与えられている（es gibt）」」（SZ 212）と述べて、このことを強調している。後者の引用においてハイデガーは、存在していることを表現するのに、„sein“を用いず、„es gibt“を用いて「存在」を語り出しているが、これは「「存在」は存在者のようなものではない」（SZ 4）という存在論的差異の強調にほかならない。これらのことから、ハイデガーが〈存在が存在者を条件づける一方で、存在は存在者の属性として存在するのではない〉と主張していることは明らかだろう。このようなしかたで、存在は存在者の経験を

アプリオリに規定することになるとされているのである。

１．３　存在と直観の形式

さらに、『存在と時間』がカントに直接に言及している箇所のひとつを見ておこう。それは『存在と時間』第 7 節である。ここでハイデガーは、『存在と時間』の基礎的存在論が採用する方法としての「現象学」を独自に特徴づけるにあたって、「現象（Phänomen）」という概念が有しうるいくつかの意味を列挙する。そのうえで、ハイデガーの「現象学」が対象とするべき「現象」概念を以下のように見定める。

> カント的な問題系の地平においては、［…］そのようにおのれ自身に即しておのれを示すもの（「直観の形式」）が、現象学の現象である。（SZ 31）

ここでハイデガーは、『純粋理性批判』における「経験の可能性の条件」としての直観の形式を、『存在と時間』の方法である限りの「現象学」が対象とすべき「現象」として位置づけている。ハイデガーはこの引用に続けて、「現象」を『存在と時間』の体系のうちに位置づけようと試みていく。そこでは、以下のように述べられる。

> ［…］際だった意味で、「現象」と呼ばれねばならないものとはなにか？［…］明らかに、さしあたりたいていはおのれを示さないもの、さしあたりたいていおのれを示すものに対して隠されているが、同時に、さしあたりたいていおのれを示すものに本質的に属し、さらにはその意味と根拠をなすもの［がそれである］。
>
> とくべつな意味で隠されたままであり、あるいはまた「覆われ」へとふたたび堕落し、「偽装されて」おのれを示すものとは、あれこれの存在者ではない。［…］存在者の存在である。（SZ 35）

注釈を必要とする言葉遣いがいくつか見受けられるが、この引用の内実は比較的シンプルな主張であろう。ハイデガーにとっての「現象」は、ふつうそうであるような「あれこれの存在者」ではなく、さしあたりたいていは隠されている「存

在者の存在」ということである[9]。

そして以上ふたつの引用から理解できるのは、ハイデガーが、カントにおける経験の可能性の条件を、みずからの体系における「存在」と対応させているということである。つまり、『存在と時間』における存在とは、先ほど確認したとおり存在者を規定するのだが、それはまさに超越論的哲学における経験の可能性の条件として条件づけるのである。門脇もこうした議論に注目して、「ハイデガーはここで明らかに、カント的なアポステリオリとアプリオリの区別を存在者と存在の区別に転用し、存在論的アプリオリによって存在論的差異を説明しようとしている」（門脇 2002, 146）と明快に整理している。

以上から理解されるように、存在は、存在者のように存在しない、つまり存在者がそれ自体として有する属性ではないという意味で観念的であるが、経験される存在者がそれに客観的に規定されているという意味で実在的であるということである。かくして、『存在と時間』における経験の可能性の条件としての「存在」とは、いわば「超越論的観念性と経験的実在性」を有したアプリオリな諸条件として位置づけられうるのである[10]。

『存在と時間』は超越論的哲学の構えを導入することで、存在者を経験するにあたって存在（了解）の超越論性をみとめる立場をとっていたことが明らかになった。いまや『存在と時間』の基本的な構えが、超越論的哲学に貫かれていることは明らかだろう[11]。しかし、ハイデガーはカントから超越論的哲学をたんに継承しただけではない。ハイデガーは、超越論的哲学を継承するにあたって、そこに決定的な改訂も加えたのである。次節では、企投（Entwurf）という概念に注目することで、その「改訂」の内実を明らかにしよう。

２．『存在と時間』における超越論的哲学の改訂

「企投」とは、もともと『純粋理性批判』で用いられていたことばである（KrV BXIII）。その影響関係もすでに先行研究において指摘されているが、ハイデガーは、『存在と時間』でこの企投を了解の実存論的構造として採用する（cf. SZ 145）[12]。前節で私たちは、存在者を経験することが、経験の可能性の条件としての存在へと向けて存在者を了解するということによって可能となっているしだいを確認した。「企投」という概念を導入することで強調されるのは、了

解における存在のアプリオリ性である。さきの引用において、存在とは「それへと向けて存在者がつねにすでに了解されているところのもの」であるとされていた。これは企投にアクセントをおくことで〈存在へと向けて企投することで存在者を了解する〉と換言される。いわば、企投においては存在へと向けて企投することに力点がおかれているのである。

このとき、企投される存在を了解するしかたが変化するならば、存在者を経験するしかたも、なんらかの変化を免れないことになるだろう。そして存在とは『純粋理性批判』における経験の可能性の条件に相当するものであったが、カントにとってこのような条件が変化することはみとめられない[13]。それに対してハイデガーは、存在了解が転換することを積極的にみとめるのである。ここにおいて、ハイデガーはカントから区別されることとなる。カントと異なりハイデガーがみとめるのは、そこへと向けて企投される存在が変容すること、つまり存在了解の転換の可能性である。ここに、ハイデガーが超越論的哲学を継承するのみならず、ラディカルに更新した点が存している。

ハイデガーが、こうした存在了解の転換について具体的に言及している箇所を参照しよう。それは『存在と時間』の第 69 節(b)、存在了解の「転換（Umschlag）」・「変様（Modifikation）」を語る箇所である（SZ 361）。ハイデガーは歴史的に学の展開をふりかえりながら、手元的存在者（Zuhandenes）が眼前的存在者（Vorhandenes）として語られるようになったときに、「世界内部的存在者を配慮的に気遣いながら交渉することを導く存在了解が転換した」（SZ 361）と述べている。ハイデガーがここで語っているのは、数学的企投の導入によって、「量的に規定可能な構成的諸契機へと向かう主導的な視線」（SZ 362）が全面化した結果、近代的な自然科学の対象が生成したという歴史的な転換の実例なのである[14]。こうした実例を提示することからも、ハイデガーが存在了解の転換を積極的にみとめていることが理解されるだろう。

この第 69 節(b)の記述を、具体例に即してより平易に説明したホーグランドの解釈も確認しておこう（Haugland 2013, 172-178）。彼が引き合いに出すのはガリレオである。ガリレオは、木星の衛星（いわゆるガリレオ衛星）を望遠鏡で発見したことで知られている。しかし、ガリレオがこの発見を公にしたとき、即座にその実在が認められたわけではなかった。というのも、その批判者たちは、その衛星を望遠鏡のレンズに付着した汚れなどとみなして、ガリレオが恣意的につくり

だした仮象とみなしたからである。こうした事態は、批判者たちがガリレオの新たな発見を妬んで意地悪したということに由来するのでも、宗教的な信念に基づいて否定したことに由来するのでもない。批判者たちは、そもそもガリレオ衛星を存在者として経験することができなかったのである。これは偏に、企投の差異に基づいている。総じて批判者たちは、天動説を採用していたのであるが、天動説から木星が衛星を有していることを説明するのは困難である。彼らは天動説を支える学の根本諸概念へと向けてガリレオ衛星を企投した結果、その衛星を存在者として了解することはできなかった[15]。なぜなら、彼らが「それへと向けて」企投する存在は、ガリレオ衛星を存在者として了解するものではなかったからである[16]。

以上から理解されるように、それへと企投されるところの存在の了解が変化することは、学的体系や或る存在者の現実存在に関わる判断までも変化させることになる。存在了解の転換が、経験の可能性の条件の変化である以上、それは経験の対象を大きく変化させることを意味するからである。カントが純粋悟性概念たるカテゴリーとしての可能性の条件にこうした可塑性をみとめないであろうのに対して、ハイデガーは「存在了解の転換」という論点を導入することによってこれをみとめるのである。すなわちハイデガーは、カントの超越論的哲学を受容しつつも、経験を「条件づける」可能性の条件の側に転換をみとめるという点において、静態的な超越論的哲学の枠組みを改訂したのである。ここに、超越論的哲学のバリエーションとしての『存在と時間』が有する独自性が存していたといえよう。

まとめておけば、『存在と時間』のハイデガーは、超越論的哲学を継承しつつ、存在を存在者と出会われるための「可能性の条件」とみなした。しかしその際、条件づけるものである存在（了解）の側に可塑性をみとめることで、カント的な超越論的哲学を改訂した。たとえばラフォントが、こうした企投すべき存在が純粋理性に由来するとみなすのがカントであるのに対して、歴史的に変化しうる文化に由来するとみなすのがハイデガーであると整理し、「企投の歴史的恣意性」を指摘しているとおりである（Lafont 2015, 282-285）。こうして超越論的哲学の枠組みを採用しながらも、可能性の条件に歴史的な可塑性を導入しようとする『存在と時間』の試みは、さしあたり「歴史化された超越論的哲学」の提示として整理することができるだろう。

３．超越論的哲学にニーチェを導入する

本稿はここまで、超越論的解釈と呼ばれる先行研究も整理しつつ、『存在と時間』の枠組みを「歴史化された超越論的哲学」として定式化した。以下で本稿は、さらにこうした「歴史化された超越論的哲学」のなかにニーチェからの影響を見いだすことで、カントとニーチェのハイブリッドとしてこれまでの議論を定式化しなおすことを目指す。しかし、これまでの研究史において、『存在と時間』に対するニーチェからの影響は非常に低く見積もられてきた。なぜなら、『存在と時間』におけるニーチェに関する直接的な言及は、三箇所（cf. SZ 264; 272; 396）にとどまっているからである。そのなかでも、ニーチェからの影響を指摘する数少ない先行研究は、しばしば良心論に注目をよせてきた[17]。本稿はこうした個別の論点ではなく、歴史化された超越論的哲学という『存在と時間』の基本的な構えそれ自体のうちにニーチェからの影響を見いだすことを目指してゆく。

前節では『存在と時間』第 69 節(b)の記述や、ホーグランドの提示した具体例をつうじて超越論的哲学の歴史化について整理したが、ハイデガー自身も、『存在と時間』でまさにこうした存在了解の転換をみずから遂行しようと企てていたといえる。それは、眼前的存在性のみに定位しているカテゴリーの批判、換言すれば、いわゆる「現前性の形而上学批判」として展開されたものである。こうした眼前的存在性にもとづく従来のカテゴリーに対してハイデガーは「実存カテゴリー」という新たなカテゴリーを導入することによって転換を企てた。そして彼自身は、こうした転換を「存在論の歴史の破壊」（SZ 19）と呼んでいた。こうした「破壊」というモチーフは、『存在と時間』においてもっとも重要な主題のひとつであるとさえいえる（cf. Dastur 1990; Taminiaux 1989; 稲田 2006; 門脇 2010; ブラーグ 1994）。つまり、ハイデガーは『存在と時間』をつうじて、既存の存在論を破壊することで、眼前的存在性のみに基づく存在了解を転換しようと試みていたのである。

さて、こうした破壊については、第 6 節で「破壊による批判は、「今日」に、そして存在論の歴史の支配的な取り扱いかたに向けられている」（SZ 22）と語られていることに注目せねばならない。先に述べた存在論の歴史の破壊に加え、「今日」の批判という印象的な表現が用いられている。ここで想起すべきは『存

在と時間』第 76 節の議論である。そこでは、以下のように論じられている。

> 把握された実存可能性を将来的・反復的に了解することからこの今日が解釈されているかぎりで、本来的な歴史学は、今日を脱現在化すること、つまり今日の頽落した公共性から苦しみながらじぶんを解き放つことになる。記念碑的・好古的歴史学は、本来的歴史学として、必然的に「現在」の批判となる。（SZ 397）

この引用においては、実存可能性の将来的・反復的な様態での了解、つまり本来的な様態での了解をつうじて、「本来的な歴史学」と呼ばれるものが、今日の非本来的なありかたである現在化から脱する、「今日の頽落した公共性」から解放されるということが語られている。今日の頽落した公共性とは、具体的には眼前的存在性のみを存在とみなすような了解のことも指しているから、この引用は第 6 節における破壊に関する議論を歴史学の議論によって反復したものであるといえる。そして、この本来的な歴史学として挙げられているものこそ、ニーチェが「生にとっての歴史の利害」で論じた「記念碑的・好古的歴史学」ほかならないのである。つまり、『存在と時間』で今日に向けられた「破壊」である存在了解の転換が、ニーチェ的な歴史学に接続されているのである。振り返ってみれば、『存在と時間』第 3 節ですでに「系譜学」（SZ 11）が、後の「破壊」を予感させるかたちで言及されていたのだった[18]。

ここで確認しておけば、のちに「系譜学」へと収斂するニーチェ的な歴史学の目的は、「道徳的諸価値の批判」（GM, Vorrede 6, 265）であった。そこでは、「所与として、事実として、あらゆる疑問を越えたものとして受けとられてきた」（GM, Vorrede 6, 265）諸価値の価値が問いの俎上にあげられた。そしてニーチェ自身は、こうした批判をつうじた価値転換を企てていたのである。まさにハイデガーも、先にみたとおり、『存在と時間』で眼前的存在性にもとづくカテゴリーの破壊を企てていた。そして、『存在と時間』出版同年の 1927 年夏学期「現象学の根本諸問題」においては、『存在と時間』の未公刊部を思わせるかたちで哲学史を系譜学的に探究するなかで制作的存在論という限界を画定し、眼前的存在性にもとづく存在論の一面的な方向づけの「現象学的破壊」（GA24, 31）を試みたのだった。つまり、ニーチェが価値転換のためにそうしたのと同様に、ハイデ

ガーは存在了解の転換のために系譜学を遂行したのである。

『存在と時間』の基本的な枠組みは、超越論的哲学を採用しながら、その可能性の条件としての存在了解に転換の可能性をみとめるというものであった。そして、本稿で確認してきたとおり、その転換の方法として、ニーチェ的な歴史学である系譜学が採用された。まさにこれは、系譜学をつうじて価値転換を目指したニーチェの身振りとみなすことができる。まとめれば『存在と時間』のハイデガーは、超越論的哲学を存在と存在者の関係という根本的なところで採用しつつも、その静態的な可能性の条件に対してニーチェの価値転換を存在了解の転換として翻訳しつつ導入し、その方法として系譜学も採用したのであった。このようにして『存在と時間』の超越論的解釈はカントのみならずニーチェの影響を正しく見積もることでアップデートされねばならないだろう。

４．結論

本稿は、まず超越論的解釈と呼ばれる先行研究の潮流を整理しつつ、存在者の可能性の条件として存在が位置づけられていることを確認することで、『存在と時間』における超越論的哲学の強い影響をみた。それとともに、存在了解が転換することをハイデガーがみとめていたことを確認することで、超越論的哲学を改訂していたことも確認した。そして、先行研究について新たな論点を付け加えるかたちで、ニーチェ的な価値転換が存在了解の転換として導入され、その方法として系譜学が採用されていることを指摘した。こうして本稿は、『存在と時間』をカントの超越論的哲学の内部にニーチェの価値転換を導入することによって成立していることを主張したのである。

このように『存在と時間』を解釈することによって、本稿は近年の超越論的解釈という解釈潮流に新たな知見をもたらしたとともに、ハイデガーの『存在と時間』以後の思考に新たな視座をもたらすことにもつながる。『存在と時間』以後、ニーチェへの直接的な言及の増加とともに、超越論的哲学に対する批判も前景化してゆくと一般に考えられている。しかし、本稿は前期哲学に対するニーチェからの影響を明らかにしたことによって、1930 年代にかけての一貫した参照項を見出すことができた。これは、1930 年代において大きな変化を見せたハイデガー哲学の全体像を明らかにすることに寄与するだろう。

また、本稿はハイデガー『存在と時間』をカントの超越論的哲学の受容のみにとどまらない、ニーチェの価値転換を導入した、歴史化された超越論的哲学として提示した。これにより、ニーチェをカントの後継者として位置づけつつ、独自の「超越論的経験論」という立場を提出したドゥルーズをはじめとして、ニーチェを受容しつつカントを批判したフランス現代哲学と総称される哲学者たちの先駆者として『存在と時間』を哲学史的に位置づけることも可能になる。そのように位置づけた後には、『存在と時間』がフランス現代哲学に対して有する優位をも明らかにする作業が必要となろう。この作業は、存在了解の転換をもたらす経験を具体的に記述した「死への先駆」の解釈によって果たされるはずである。しかし、これは稿をあらためて論じなおされねばならないことがらにほかならない。

---

[1] 先だって、ハイデガーが超越論的観念論について以下のように一定の評価を与えていることを想起しておこう。「観念論ということばが、存在は決して存在者をつうじて明らかにされることはできず、あらゆる存在者にとってそのつどすでに「超越論的」なものであるという理解を意味しているならば、観念論のうちには、哲学的な問題系の唯一正しい可能性が存していることになる」（SZ 208）。

[2] こうした超越論的哲学と事実性・歴史性の対立という構図それ自体を批判した、記念碑的な研究として Crowell(2003)を参照のこと。

[3] ここでは英語、ドイツ語の研究を挙げたが、主としてフランス語で業績を発表するクルティーヌも早い段階からこうした超越論的な解釈を提示していた（Courtine 1990, ch.5）。日本語圏でのこうした研究の導入は、細川の萌芽的な業績が挙げられる（細川 1992）。

[4] オクレントはのちに、みずからのこうした萌芽的な発想について、より明確な「超越論的解釈」として提示しなおしている（Okrent 2007）。丸山は、こうした発想をさらに展開させている（丸山 2019）。

[5] キジールの研究は、前期ハイデガーに対するカントの影響を生成史的観点から精査しており いまなお有用である（Kisiel 1995, 408-415）。

[6] たとえば以下を参照のこと。「たほう、存在の問いは、現存在それ自身に属している本質的な存在傾向、つまり先存在論的な存在了解を徹底化することにほかならないのである」（SZ 15）。

[7] ただし、荒畑はここに引用した「超越論的」の定義がそもそもヒュームのような非超越論的な哲学すらも包含してしまう肌理の粗いものであると主張しつつ、『存在と時間』の超越論的解釈を批判している（荒畑 2009, 49）。かくして荒畑によれば、本稿のようにこの定義と『存在と時間』の親和性を明らかにしても、『存在と時間』が超越論的であるとはいえない。しかし、この「超越論的」という用語を定義する文中に含まれる„so fern“節（KrV B25）の内容と、アプリオリな総合判断の可能性を問うというカントの動機を勘案すれば、この定義のうちにはヒュームにはない、「対象」をアプリオリに可能にするという論点が含まれていることになる。そして、のちに確認するように、ハイデガーのうちにもこうした論点は〈存在が存在者を存在者として規定する〉というかたちで含まれている。それゆえ、この点に関わる荒畑の『純粋理性批判』解釈と、それに基づいたハイデガー解釈のいずれも疑念が残る。この脚注に関わる『純粋理性批判』の解釈については、富山豊氏からご教示いただいた。記して感謝する。。

[8] こうした論点についてラフォントは、超越論的なもの／経験的なものの区別が存在／存在者という存在論的差異に対応していると指摘していた（Lafont 1994, 36）。

[9] 上記引用箇所も含む『存在と時間』第 7 節についてはハン＝パイルが詳細な分析を加えてい

る（Han-pile 2005）。
[10] ブラットナーが、こうした論点をはじめて明確に提示した論者であるといえよう（Blattner 1994, 185-186）。
[11] ここでは取り扱わないが、『存在と時間』が有する諸学に対する基礎づけという動機もカント的である。これについては『存在と時間』第 3 節を参照せよ。また、本稿では取り扱うことのできなかったが、『存在と時間』における超越論的側面に対するフッサールの超越論的現象学の影響は、クロウェルによって強調されている（Crowell 2001, ch. 9）。こうした論点は、富山が近年の研究まで手際よく整理している（富山 2017）。
[12] この点に関しては、ハン＝パイルと細川がすでに指摘している（Han-pile 2005, 89; 細川 1992, 220-221）。
[13] もちろん、カントも経験概念については変化をみとめるだろう。それゆえ、さしあたり以下のホーグランドの例はアナロジーにすぎない。ただし、それでもなおハイデガーはカントから区別されねばならない。これについては後に論じるハイデガーの眼前的存在性批判という論点を参照のこと。
[14] エンゲルランドとラフォントも、こうした論点に着目する論者である（Engelland 2017; Lafont 2007）。また、ゲートマンはこの議論を中期以後に展開される学問批判・形而上学批判の萌芽にすぎないとみなしているが（Gehtmann 1993, 194）、それに対して本稿はのちに見るようにすでに『存在と時間』の段階でみられるニーチェからの影響として解釈する。
[15] 『存在と時間』において、学における根本諸概念の了解は、その学に属する存在者を規定するという意味において、存在了解とほとんど同一視されている（SZ 9）。
[16] ホーグランドに加えて、ボウラーもハイデガーの学問論を検討する文脈において学的企投の変遷という議論の重要性を指摘している（Bowler 2008, 110）。
[17] この点に関する現時点でもっとも包括的かつ詳細な研究としては、齋藤による研究を参照のこと（齋藤 2012, ch. 6）。古典的な研究としては、ペゲラーが決意性を「力への意志」に重ねあわせて解釈している（Pöggeler 1963[1990], 111）。
[18] 熊野純彦も『存在と時間』の訳註においてこうした破壊と系譜学の関係を指摘している（熊野 2013, 111）。

［凡例］
以下の文献は略号でもって表示する。
SZ：Heidegger, Martin. 1993. *Sein und Zeit,* Niemeyer, 17te Auflage.
GA24：Heidegger, Martin. 1975. Gesamtausgabe, Bd. 24, Klostermann.
KrV：Kant, Imannuel. 1993. *Kritik der reinen Vernunft*, Ferix Meiner.
GM：Nieztsche, Friedrich. 1968. *Zur Genealogie der Moral*, Kritische Gesamtausgabe, G. Colli and M. Montinari (eds.), Abt. 6, Bd. 2, de Gruyter.

［参考文献］
荒畑 靖宏. 2009.『世界内存在の解釈学』, 春風社.
Blattner, William. 1994. “Is Heidegger a Kantian Idealist?”, in Inquiry: 37.
Bowler, Michael. 2008. *Heidegger and Aristoteles: Philosophy as Praxis*, Bloomsbury.
ブラーグ レミ. 1994. 「ギリシア世界への通路としての現象学」ジャン・リュック・マリオン編『現象学と形而上学』, 三上真司訳, 法政大学出版局.
Courtine, Jean-François. 1990, *Heidegger et la phénoménologie*, Vrin.
Crowell, Steven. 2001. *Husserl, Heidegger, and the Space of Meaning*, Northwestern University Press.
Crowell, Steven. 2003. “Facticity and transcendental philosophy”, in *From Kant to Davidson*, Jeff Malpas (ed.), Routledge.
Dastur, Françoise. 1990. *Heidegger et la question de temps*, P.U.F.

Engelland, Chad. 2017. *Heidegger's Shadow: Kant, Husserl, and the Transcendental Turn*, Routledge.
Gehtmann, Carl. 1993. *Dasein: Erkennen und Handeln*, Gruyter.
Guignon, Charles. 1983. *Heidegger and the problem of knowledge*, Hackett Publishing.
Han, Béatrice. 2005. "Early Heidegger's Appropriation of Kant", in *A Companion to Heidegger,* Hubert. L. Dreyfus and Mark A. Wrathall (eds.), Blackwell Publishing.
Haugeland, John. 2013. *Dasein Disclosed*, Joseph Rouse (ed.), Harvard University Press.
細川 亮一. 1992. 『意味・真理・場所』, 創文社.
門脇 俊介. 2002. 『理由の空間の現象学』, 創文社.
門脇 俊介. 2010. 『破壊と構築』, 東京大学出版局.
Kisiel, Theodore. 1995. *The Genesis of Heidegger's Being and Time*, University of California Press.
熊野 純彦. 2013. 『存在と時間：一』, 岩波文庫.
Lafont, Cristina. 1994. *Sprache und Welterschließung*, Suhrkamp.
Lafont, Cristina. 2007. "Heidegger and the Synthetic A Priori", in *Transcendental Heidegger*, Steven Crowell and Jeff Malpas (eds.), Stanford University Press.
Lafont, Cristina. 2015. "Transcendental versus Hermeneutic Phenomenology in Being and Time", in *The Transcendental Turn*, Sebastian Gardner and Matthew Grist (eds.), Oxford University Press.
丸山 文隆. 2019. 「ハイデッガー『存在と時間』における死への先駆の役割について」『哲学の探求』vol. 46.
Okrent, Mark. 1988. *Heidegger's Pragmatism*, Cornell University Press.
Okrent, Mark. 2007. "The "I Think" and the For-the-Sake-of-Which", in *Transcendental Heidegger*, Steven Crowell and Jeff Malpas (eds.), Stanford University Press.
Pöggeler, Otto. 1963[1990]. *Der Denkweg Martin Heideggers*, Neske.
齋藤 元紀. 2012. 『存在の解釈学』、法政大学出版局.
Taminiaux, Jacques. 1989. *Lecturs de l'ontologie fondamentale*, J. Million.
富山 泰斗. 2017. 「ハイデッガー『存在と時間』における超越論的観念論」『哲学の探求』vol.44.
von Herrmann, Friedlich-Wilhelm. 1971[2004]. *Subjekt und Dasein: Interpretationen zu "Sein und Zeit"*, Klostermann.